

(2) 品質について考えよう

市場レポートを作成するときに、何度も難しい判断を求められるのは“品質の評価”についてです。それが他県産との比較であれば未だしも、県産品における優劣を伝えなければならない場合に、良かれ悪しかれ如何様に受け止められるのか先読みできない中で改善を求めていかなければならないからでしょうか。先日も市場関係者が山菜を評して曰く

「A産地のものは絶品だけど、B産地のものはアレは何だね」と一言の物言いでした。彼の立場からすれば両産地を評価し、A産地のものには最高値を付けても欲しいが、B産地のものは買って損するような品だよとでも言いたかったのではないのでしょうか。

衰えが云々されている卸売市場流通ですが、青果物流通の中で60%以上の物流を担っており、かつ卸売機能の中核である価格形成に係わる面では市場外流通をも含めた全ての指標となっています。そして、市場関係者、卸のセリ人、仲卸、小売買参人などは、それぞれが持つ豊富な経験に裏打ちされた知識によっての評価機能をセリ場でやり合うことで価格が生まれていきます。その拠り所となるのが“品質”であり、その良し悪しが数量の安定性などとともに出荷品のランク付けや産地評価に直結するものといえます。品質についての想い入れは、作る側（生産者）や食べる側（消費者）以上に重視しているはずで

す。

品質については、それを取り扱う場面ごとに異なる観方、考え方が云々されますが、最終的には消費者が利用する段階で食品として評価できるか否かによって決まると思います。鮮度が良い、食味が良い、栄養価が高い、安全である等々をその基準として判断しますが、流通段階では“食品＝商品”として見ており、店持ちが良いか、見てくれが良いか、保存し易いか、加工し易いか等々の幅広い観点で評価をし、極論すれば間違いなく儲けにつながるか否かを含めた評点を与えてくるものです。それだけに厳しい評価をされるのが常であり、物言いも極端に走りがちであることを了としなければならなくなります。もっとも品質について厳しい観方、考え方を強調していくべきだと思います。

【今回のポイント】

- ・市場関係者の物言いは簡潔にすぎるのですが、その中味はきわめて濃いものがあります。
- ・彼ら一瞬のうちに品定めをし、価格決定をしなければならないだけに、すべての言動も丁半で済ましてしまいがちですが、評価そのものは専門性の高いものがあります。
- ・言外に潜む意を真摯に受け止める努力が必要かもしれません。